

—伝統と進取の気風の地—

(1) はじめに

明治維新により、京都は東京^{てんと}奠都という大きな変動を迎えた。天皇だけでなく、新政府の官僚、多くの公家衆、各藩の京都詰役人、そして一部の御用商人も京都を離れた。そんな逆境にも負けず、伝統と進取の気風を併せ持つ京都の人々は、再生に向かって自前の産業や都市機能を作り上げ、近代化を成し遂げた。

その象徴の一つが琵琶湖^{そすい}疏水の開削である。また、公園や美術館、競技場といった文化・スポーツ施設の建設により、市民の憩いと娯楽の文化が形成された。

近代化を進めるにあたり人材育成が重視され、建設が進められた小学校は、住民の自治組織である「番組」とに開校したため、番組小学校と呼ばれ、建設費と運営資金の多くは番組内の町人が出資し、地域ぐるみで未来を担う子供たちの教育に力を注いだ。市民の教育への強い関心は京都の大学創設も促し、京都は人口に占める学生の割合が日本一であるなど、学園都市としても知られる。

さらに、京都の商業の特徴は、伝統的な産業と近代化産業が相互に刺激し合い交じり合いながら発展し、また大都市として古くから活発な消費活動が行われてきたことである。三条通は、東海道の西の起点に位置し、近世以降の商業の中心地として、大都市を支えてきた。烏丸通も、明治45年(1912)の拡幅により大正初期から商業の中心地として発展し、大都市を支える。

(2) 古都の再生と近代の憩いと娯楽に見る歴史的風致

ここでは、近代化の象徴である琵琶湖疏水や市民が憩う公園を例として古都の再生と近代の憩いと娯楽の歴史的風致を示す。

(ア) 琵琶湖疏水の歴史的風致保全

明治維新による東京^{てんと}奠都で衰退した京都に活力を呼び戻すため、近代化策(京都策)の事業の一環として、明治23年(1890)に第一琵琶湖疏水が建設された。京都にとって、琵琶湖から水を引くことは長年の夢であり、その後、明治45年(1912)には、第二琵琶湖疏水が建設され、水道事業や市電敷設等が行われ、今日における京都の近代的まちづくりの基礎となった。

(a) 建造物

○琵琶湖疏水<史跡>

琵琶湖疏水(史跡)は、滋賀県大津市三保ヶ崎の琵琶湖畔から、長等山下を抜けて山科の山麓をめぐり、蹴上から鴨川左岸に至り、南下して深草・伏見を経、宇治川に注ぐ近代の都市疏水である。第一疏水は明治23年(1890)、第二疏水は明治45年(1912)に建設された。

第一疏水の第一・第二・第三^{ずいどう}隧道の出入口、第1竪坑、第2竪坑、日本初といわれる鉄筋コンクリート橋である日ノ岡第11号橋(明治36年(1903)竣工)、インクライン、疏水分線の水路閣等が史跡に指定されている。



写真2-5-1 琵琶湖疏水

疏水分線は、第一疏水と同時期の明治20年(1887)に着手し、明治23年(1890)年に竣工した。蹴上から分岐し、南から北へ、その後西へ流れる。このうち若王子橋から浄土寺橋までの疏水にそった小道は、「哲学の道」と呼ばれる。



写真2-5-2 南禅寺水路閣

○母子地蔵

山科区の母子地蔵は、琵琶湖疏水の山科側の安朱橋近くに建つ。疏水に落ちて転落死する子供が相次いだことから、善兵衛という船頭が安朱北部住民の協力を得て、明治36年(1903)に地蔵堂を築造した(地蔵堂の奉納額に記載あり)。



写真2-5-3 母子地蔵

(b) 活動及び市街地の環境

琵琶湖疏水は、京都の近代化に貢献し、今日なお、京都の飲料水を供給する市民の生活に欠くことのできない水路である。石積みの残る疏水は、かつては水車動力や舟運、工業用水などに利用され、疏水沿いでは伸銅、製材、精米、製麦などさまざまな営みが行われた。現在は、この琵琶湖疏水は、豊かな水量と疏水沿いの柳や桜等の樹木と調和し、潤いと緑豊かで良好な岸边景観を形成している。

また、琵琶湖疏水の建設に伴い整備された、蹴上発電所や蹴上浄水場、インクライン等の関連施設は近代化産業遺産としての認定を受けるなど、その本来機能のみならず、優れた近代土木景観と緑豊かな水辺空間という観点からも、市民に親しまれている。

例えば 南禅寺境内には、当時としては画期的な洋風建造物の水路閣が設置され、今日では緑豊かな周囲

の歴史的景観によく溶け込んでいる。

○哲学の道

疏水分線沿いの哲学の道は、西田幾多郎などの哲学者らが歩いた道として知られ、現在でも春の桜や秋の紅葉をはじめ、多くの人々が散策するなど、疏水沿線は散策の場として市民に親しまれている。

地元住民が昭和44年(1969)に疏水分線の保存運動を進めるなか、その必要性から疏水分線の若王子橋から浄土寺橋までを「哲学の道」と決め、「哲学の道保勝会^{ほしょうかい}」を設立した(哲学の道保勝会に手記が残る)。

哲学の道保勝会は、倒木の除去や案内標識の設置など哲学の道沿いの風致維持・改善活動を行っており、地元小中学校への講師派遣やガイド、桜・紅葉情報の提供、春と秋を中心に哲学の道の大掃除、「桜まつり」の開催などに取り組んでいる。

哲学の道周辺は、若王子神社から銀閣寺に向かう疏水分線の沿岸一帯からなり、桜並木とこれらの樹木越しに立ち並ぶ建築物とが一体となって、瀟洒^{しょうしや}で洗練された岸边の景観を形成している。



写真2-5-4 哲学の道

○山科疏水

山科側の琵琶湖疏水は、山科区の市街地に近接し、かつては子供の遊びと学習の場であった。現在は春の桜や秋の紅葉など市民の憩いの場として親しまれる。疏水沿いの安朱橋北岸に祀られる母子地蔵は、築造以来地元住民により管理されている。また、地域で語り継がれてきた母子地蔵の謂れをもとに住民が作成した紙芝居は、今も地蔵盆で子供たちに読み継がれ、「かたりべ」としての一役を担っている。山科の地蔵・地蔵盆調査報告書によれば、地蔵盆の始まりは定かではないが、安朱北部では、母子地蔵が祀られて以降、いつしか町内あげての地蔵盆となっており、50年以上前から実施されている。



写真2-5-5 母子地蔵と子供たち

(出典：安朱小学校創立50周年記念誌)

20 年ほど前から地元ボランティアや近隣の洛東高校の生徒により、両岸 400m以上にわたり春は菜の花、秋はコスモスが植えられ、山科の名勝地として多くの市民や観光客が訪れる。

山科側の琵琶湖疏水周辺は、安祥寺山の山麓部にあたり、うっそうとした樹木が生い茂る天智天皇陵や疏水沿いの緑、和風住宅が立ち並ぶ緑豊かな和風空間が保全され、山地の森林と山麓部の住宅地とが風趣ある町並みを形成する。



写真2-5-6 山科区安朱橋付近の琵琶湖疏水

このように、開削から 120 年余りが過ぎようとしている現在においても脈々と琵琶湖から京都市へ命の水を供給し続ける。その本来機能のみならず、市街地近傍の緑豊かな水辺空間としても市民に親しまれており、山麓部の歴史的な町並みの中で人々の維持保全活動により良好な環境が継承されている。

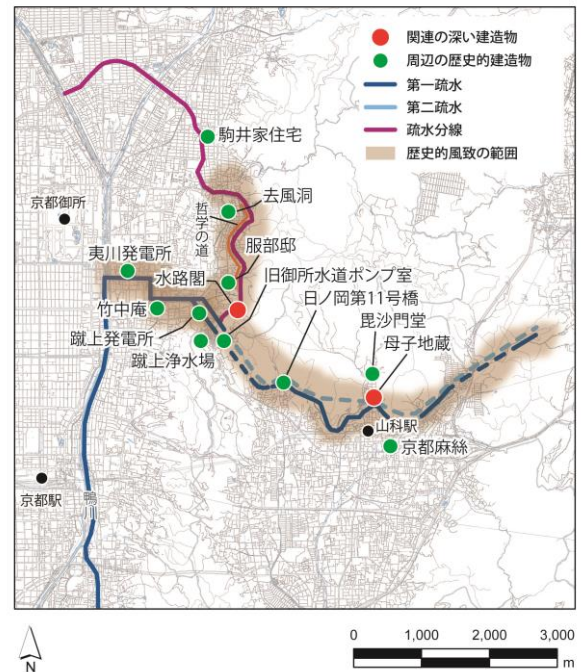


図2-5-1 琵琶湖疏水

(1) 近代公園と市民の憩い

古都の近代化に伴い、市民の憩いと娯楽の文化も新たに形成されていった。岡崎公園周辺には、平安神宮を中心に文化・芸術、教育、武芸等の施設が集積し、市民の文化的活動や憩いの場となっている。円山公園周辺は、京都の歴史的な観光地に隣接し、古くから花見などの遊興の文化が根付いている。

a. 岡崎公園

疏水事業の中心の地、岡崎において、開削後の明治28年（1895）、建都千百年記念事業として、第4回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭が開催された。この記念祭と内国博は、京都の都としての歴史を再確認するとともに、近代京都としての出発を強く印象付ける事業となり、博覧会跡地には、シンボルとしての平安神宮を中心にして、美術館や動物園、図書館、公会堂などが整備され、岡崎公園周辺は明治以降、文教地区として市民の憩いと娯楽の場として着実に整備されていった。

(a) 建造物

○平安神宮大極殿<重要文化財>、神苑<名勝>（再掲：P2-48 暮らしに息づくハレとケのまち京都）

○岡崎公園

左京区の岡崎公園は、内国勸業博覧会の会場となった岡崎において、文化的施設が急速に集積したことを背景に、京都市内で2番目の公園として明治37年（1904）に開園した（『京都岡崎の文化的景観調査報告書』より）。博覧会会場のうち、約8.3haが公園用地となり、公園計画は、北隣する平安神宮を中心に構成された。



写真2-5-7 岡崎公園

○ロームシアター京都（京都会館）

左京区の京都会館は、京都市民の文化センターとして岡崎公園に建築され、昭和35年（1960）に開館した。昭和39年（1964）の古写真にその姿が写る。設計は前川國男によるもので、岡崎公園周辺の環境との調和を考慮し、水平線を強く意識した意匠で設計された。

京都市では、平成23年（2011）に「京都会館再整備基本計画」を策定し、既存の建物を活かして未来へ引き継ぐことを基本とした再整備を行い、ネーミングライツ（命名権）制度により、通称「ロームシアター京都」として生まれ変わった。平成28（2016）年1月には、京都会館の建物価値を継承しながら、3つの近代的なホールを備えるロームシアター京都としてリニューアルオープンし、オペラやバレエなどの世界一流の舞台芸術や伝統芸能、新進気鋭の若手アーティストによる公演など、多彩な文化芸術に触れることのできる、京都を代表する文化芸術の創造・発信拠点となっている。



写真2-5-8 ロームシアター京都（京都会館）

(b) 活動及び市街地の環境

疏水事業の中心の地、岡崎において、開削後の明治28年（1895）、建都千百年記念事業として、第4回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭が開催された。

記念祭場として桓武天皇を祭るため造営された平安神宮（重要文化財）は、その社殿が平安京大内裏の朝堂院を模したもので、京都の氏神と位置付けられた。三条通から北側の神宮道は、平安神宮の表参道として位置付けられ、明治27（1894）年に道路拡張された。昭和3年（1928）には大鳥居（国登録有形文化財）も建築されている。

記念祭の呼び物として行われた時代行列は、1100年にわたる京都の都としての風俗の変遷を描いており、以後、この行列は「時代祭」と呼ばれて今日まで続けられている。時代祭の壮大な祭事を運営する市民の組織、平安講社も明治28年（1895）に発足（『日の出新聞』明治28年（1895））して以来、時代祭の行列を担当する。この記念祭と内国博は、京都の都としての歴史を再確認するとともに、近代京都としての出発を強く印象付ける事業となった。



写真2-5-9 岡崎公園周辺の賑わい（時代祭当日）

平安神宮は、伝統と進取の気風の地である岡崎にふさわしく、伝統を基盤に置いた新しい試みがなされる場として現在も活躍している。中でも、文化・芸術のまち京都の歴史的風致でも示した京都薪能は、昭和25年（1950）に京都市と京都能楽会の共催で始まり、初夏の京都の風物詩となっている。平安神宮の拝殿前に特設舞台を組み、四隅には 斎竹^{いみだけ}を配し、夕闇が迫るころ、かがり火の炎が揺らめく中で夕闇に浮かび上がる社殿を背景に、幽玄の世界が繰り広げられる。薪能の様子は、『京の年中行事』（昭和35年（1960）発行）にも記載される。

このように、伝統と歴史と近代への躍進の地である岡崎では、近代以降、伝統を基盤とした時代祭や京都薪能などの新しい活動が生まれ、既にそれ自体伝統として根付いている。これらの活動が、この地の象徴である平安神宮と一体となって、京都の風物詩として市民に受け入れられ、楽しみの一つとなっている。

記念祭・内国博に引き続き、博覧会跡地には、シンボルとしての平安神宮を中心にして、美術館、工業館などの施設が残され、常設の展示場として利用された。その後、武徳殿（明治32年（1899））が開設されたほか、東宮御慶事に際して寄せられた寄付を利用し、学術の府を唱える京都市にふさわしい事業として動物園（明治36年（1903））が整備され、商品陳列所、府立図書館（明治42年（1909））等が建設された。

大正期に入ると大正天皇の即位の儀式である「大礼（大典）」（大正4年（1915））に伴い、岡崎で大典記念京都博覧会が開催され、第一勸業館や第二勸業館、商品陳列所などがその会場となった。また、昭和天皇の即位の儀式である大礼に際しては、後に記念として大礼記念京都美術館（現京都市美術館）（昭和8年（1933））が建設されるなど岡崎は明治以降文教地区として着実に整備されていった。

昭和35年（1960）に開館した京都会館は、市民が気軽に文化芸術に触れることのできる文化施設の中

心的存在として、建物内部での催しだけでなく、岡崎公園に面して設けられた中庭でも合奏会やアート作品の展示等が開催され、岡崎公園周辺の賑わいを創出してきた。京都会館が毎月発行している「催し物ご案内」というリーフレット（昭和36年（1961）年4月以降の資料が残る）からも、開館以来現在に至るまで、演奏会や映画鑑賞会や市民寄席、大学の文化祭等、様々な催しが毎日のように開催され、市民に親しまれていることが伺える。リニューアル後は、市民の憩いの場となる賑わいスペース（ブック&カフェ、レストラン）を併設するなど、新たな賑わいを生み出している。

この文教地区の整備は、京都で1100年にわたって培われた伝統と歴史の基盤の上に、新しい近代西洋文明を受け入れて実現されたものであり、岡崎の地はここから、新しい京都の産業や文化の拠点として、市民とともに新しい近代都市景観と、歴史を背景とした新たな文化芸術活動等をつむぎだしてきたのである。



写真2-5-10 岡崎地域全景

岡崎公園周辺は、わが国でも有数の文化施設が集積した地域である。歴史的に大規模施設と農地の土地利用が繰り返される中で、現在は大規模な街区が継承され、街区内の緑や街路樹、背景となる東山とが一体となった広がりある空間が形成されている。神宮道及び仁王門通沿道は、岡崎公園周辺の諸施設とも関連して、近代的デザインで3階建て以上の堅牢建築物が多く建つ。一方、山麓部の住宅では緑豊かな日本瓦葺き和風建築による落ち着いた環境を形成している。

このように、岡崎公園周辺では、内国博の跡地を中心に、平安神宮や、ロームシアター京都（京都会館）をはじめとした近代建築群等を舞台として、時代祭や薪能、展覧会や演劇公演などの芸術活動が行われている。また、これらを取り巻く町には、芸術や教育、武芸に関連する生業が多く存在している。

これらの施設群、町並み、営みが一体となり、文教地区としての風情を醸し出し、訪れる人々は、こ

フォークの殿堂とも呼ばれ、現在はフォークコンサートが毎年秋に開催される。



图 2-5-2 岡崎公園

円山公園は、明治6年(1873)の太政官布達に基づき、明治19年(1886)に開園した京都市内で最も古い公園である。東は東山山麓の豊かな自然、他の3方は歴史と文化を有する数々の寺社に囲まれ、また、祇園枝垂桜に代表される桜の名所でもあり、市内随一の行楽地として発展してきた。

○円山公園＜名勝＞

東山を借景とした池泉回遊式庭園^{ち せん かい ゆう しき てい えん}は、七代目小川治^{お がわ じ}兵衛^{へ え}が手掛けたものである。



写真2-5-11 円山公園（出典：円山公園HP）

東山区の円山公園音楽堂は、昭和2年（1927）に音

円山公園の園内中央には、通称「祇園の夜桜」と呼ばれる有名な桜がある。正式名は、ひとえしろひがんしだれ一重白彼岸枝垂桜ざくらといい、現在は二代目。初代枝垂桜は、祇園宝寿院の庭にあったものであり、慶応2年(1866)に同院の建物が失火した後も残存した。明治6年(1873)、この枝垂桜が、周辺の樹木と共に払い下げられ伐採されそうになっているところを、時の京都府観業課長明石博高が、古木の伐採を惜しみ、金五円を出して買取り京都府に寄付した。このことを契機に、周辺が整備されるとともに、桜が多く補植された。初代枝垂桜は枯死する昭和22年(1947)まで、桜の名所の象徴として多くの花見客に親しまれた。昭和24年(1949)には、造園家佐野藤右衛門とうえもんが初代の枝垂桜から種子を採取し育てた桜を二代目枝垂桜として、初代枝垂桜と同じ場所に移植し、現在まで桜の名所として継承される。

名所としての賑わいをみせてきた円山公園では、明治8年(1875)に社寺境内外区画取調規則に基づく調査が行われ、明治17年(1884)に『下京区社寺境内取調帳』(京都府庁文書)としてとりまとめられた。この調査では、下京区の各寺社の旧境内の内訳が記載されており、八坂神社、安養寺、長楽寺、双林寺の旧境内の内訳には、「明治十二年上申分」の但し書きを付して「名所地」という項が挙げられている。この名所地が明治19年(1886)の公園開設当時の範囲に含まれているため、既に公園開設以前から、円山公園の下地ができていたと指摘されている。

現在では、公園中央部にある枝垂桜とともに市内随一の行楽地となっており、明治期から桜の名所として、花見の時期になると多くの人々が訪れる。円山公園の

枝垂桜は、別名「祇園の夜桜」とも呼ばれ、園内には約700本の桜が咲き誇り、夜桜の名所として花見客で賑わう。



写真2-5-13 円山公園之桜

(出典：『都名所写真帖』(明治36年法蔵館))

円山公園内の円山公園音楽堂は、昭和2年(1927)の開堂以来、80年間以上にわたり京都が誇る文化施設の一つとして長く市民に親しまれ、周辺地域と連携したコンサートや集会などの催しの場にも利用されている。

円山公園周辺は、東は東山に続き、西は八坂神社、南は高台寺、北は知恩院等に隣接し、京都の一大観光地を形成する。青蓮院や知恩院、八坂神社及び円山公園等の変化に富む要素と東山麓の自然とが組み合わせられて、京都の代表的景勝地となっている。これを取り巻く形で、神宮道をはじめ、蹴上から栗田・華頂等の地区や三条通周辺等の散策道沿いでは趣のある沿道の町並みが形成される。

このように、近代に築造された円山公園やその周辺では、花見や音楽コンサートなどの近代の文化的な遊興活動が根付いており、歴史的な町並みの中で市民の憩いの場としての風情を醸し出している。

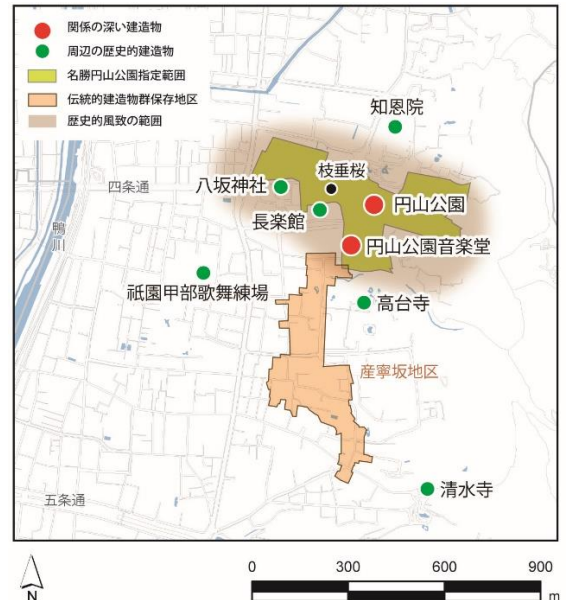


図2-5-3 円山公園

(7) まとめ

琵琶湖疏水に代表される近代歴史遺産は京都の近代的まちづくりの基礎となった。この先進の自負が、京都に暮らす人々にとって誇りとなり、普段の生活における憩いの場所として大切に維持保全されている。

平安神宮や岡崎公園を中心とする岡崎では展覧会や演劇公演などの芸術活動が行われるほか、時代祭などの祝祭の場となり多くの人が訪れる。また、円山公園では古くからの花見の名勝地として、市民の遊興の地として、今も親しまれている。

これらの施設群、町並み、営みが一体となり、民衆の娯楽の場としての風情を醸し出し、訪れる人々は、京都が今なお伝統と進取の気風を持ち、文化・芸術の中心地の一つであることを感じる。

(3) 地域・学生の自治活動に見る歴史的風致

ここでは、近代における地域自治の象徴である番組小学校と学園都市である京都における自由な気風の地の歴史的風致を示す。

(ア) 番組小学校と地域自治

京都では、明治時代の学制公布に先駆けて、番組小学校と呼ばれる日本で最初の学区制の小学校がつけられた。室町時代から続く町衆の自治組織「町組」が改名された「番組」を基礎に、府からの下付金と町衆の拠出金や寄付によって学校が創設され、総合庁舎的な役割（教育（小学校）、会合（町会所）、警察・交番、塵芥処理や予防接種（保健所））を持ち、運営費を「番組」が負担した。明治2年（1869）、上京二十七番組小学校（柳池校）で開校式が開かれ、同年中には、合計64の番組小学校が開校した。

開校当時64校あった番組小学校は、戦後の学制改革で11校が中学校となり、また近年は小学校の統合などによりほとんどは通学単位ではなくなっているが、「元学区」として自治活動の単位に位置づけられている。

a. 小学校における自治活動

(a) 建造物

○京都芸術センター（元明倫小学校）

<登録有形文化財>

中京区の元明倫小学校は、京都市営繕課（当時）所蔵資料によると昭和6年（1931）に建築された鉄筋コンクリート造2階建ての建物である。

明治2年（1869）に下京三番組小学校として開校した明倫小学校は、平成5年（1993）閉校となり、平成12年（2000）から京都市における芸術の総合的な振興を目指して開設された創造・発信の拠点として活用されるとともに、地域自治の場としても継承され、地域のイベント等に活用されている。



写真2-5-14 元明倫小学校

○立誠ガーデン ヒューリック京都（元立誠小学校）

下京区の元立誠小学校は、京都市内に現存する最古の鉄筋コンクリート造校舎で、京都市営繕課（当時）

所蔵資料によると昭和3年（1928）に建築された。平成5年（1993）に閉校となったが、地域自治の場は継承され、地域のイベント等に活用されていた。令和2年（2020）に複合施設として整備されたが、校舎の一部は外観や内部の主要な意匠を活かして保存され、地域自治の場も継承された。



写真2-5-15 元立誠小学校（提供：ヒューリック株式会社）

(b) 活動及び市街地の環境

既往の研究論文によると、番組小学校は、行政機能を兼ねた複合庁舎として構想され建築された。校舎には、本来必要な教室に加え、「町総代溜」や「戸長役場」など、町会所的機能や、番組の会議や成人教育のための講堂が同居した。また、その経営は番組内の居住者からの出資とし、番組によっては資金捻出のために小学校会社を設立するなどした経緯があり、番組による独立採算的な経営方法が取られていた。明治2年（1869）に全国に先駆けて学区制の小学校として開校した番組小学校は、現役の学校として生き続けた。



写真2-5-16 明倫小学校での区民運動会（昭和22年（1947））

（所蔵：学校歴史博物館）

現在、元明倫小学校や元立誠小学校のように、学校統合により閉校となった後も、地域の会合や夜間スポーツ、消防団の訓練、バザー、祭り、運動会など多様に活用され、まちの活性化に貢献しながら、以前と変わらず地域のシンボル・自治活動の拠点として大切に活用されている。

体育振興会や消防団、自主防災会、女性会、老人会、

少年補導委員会，民生児童委員協議会，交通対策協議会などの自治活動の寄り合いや，学区民同士のスポーツや夏祭り等の活動が行われる際には，活動の拠点となる学校や学校跡地に，元学区の住民が三々五々集まっては帰って行く様子が見られる。



写真2-5-17 元立誠小学校で開催される高瀬川夏祭り

元番組小学校が残る地域周辺は，伝統文化や生活文化により培われた京町家を残す趣のある旧市街地にありながら，現代の都市活動が展開している地区であり，京町家を中心とする和風を基調とした町並みを形成しつつ，現代建築物が共存する町並みを形成する。

元明倫小学校がある明倫学区は，京都の旧市街地の中でも「田の字地区」と呼ばれる，東西南北を幹線道路に囲まれた地域で，商業施設や共同住宅等の中高層建築物が多く見られるが，祇園祭の山鉦町も多くあり，職住共存の京町家が連担する町並みが今も各所に残る。

元立誠小学校がある立誠学区は，東は鴨川に面し，西は寺町通の東側，北は三条通の北側，南は四条通の北側に囲まれた市内でも最も賑やかな繁華街を有する。「先斗町界わい景観整備地区」に指定された地域は，江戸時代からの京都を代表する花街の一つであり，茶屋建築等の花街文化を継承する町並みを形成している。元立誠小学校は高瀬川に面して建ち，高瀬川に架けられた正面通路橋が玄関車寄せに繋がる小広場を形成している。この校舎や高瀬川の存在が，歓楽街の界限に格式高い空気を醸成する。

表2-5-1 主な旧校舎が残る元番組小学校

番号	番組	校名(S22年当時)	建築年	現状
①	上17	待賢小学校	昭和11年	福祉施設
②	上25	龍池小学校	昭和4年	文化施設
③	上28・29	京極小学校	昭和13年	現役
④	上31	銅駝小学校	昭和13年	現役(※1)
⑤	下1	乾小学校	昭和12年	現役(※2)
⑥	下3	明倫小学校	昭和6年	文化施設
⑦	下5	生祥小学校	昭和15年	
⑧	下6	立誠小学校	昭和3年	複合施設
⑨	下11	開智小学校	昭和12年	文化施設
⑩	下22・23	淳風小学校	昭和5・6年	
⑪	下27	清水小学校	昭和8年	宿泊施設

※1 銅駝美術工芸高校 ※2 洛中小学校

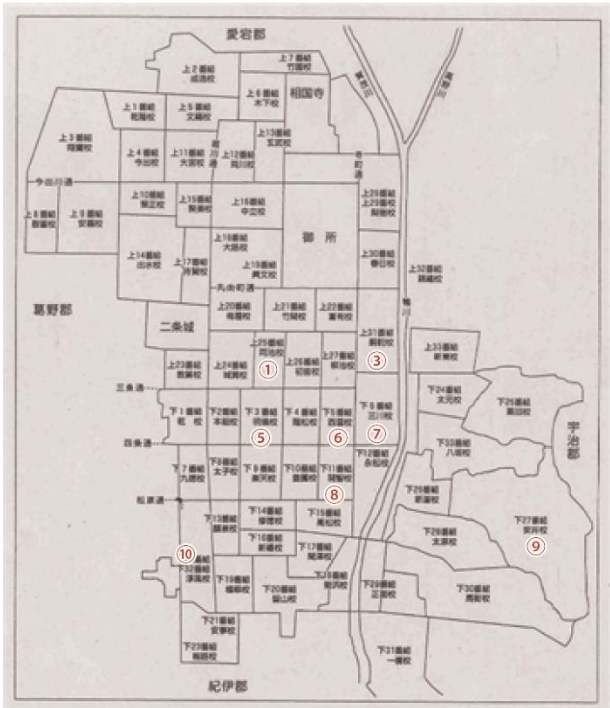


図2-5-4 京都番組区画図(明治2年(1869)正月晦日改正)

このように，京都の町衆の力によってつくられた番組小学校は，今も地域自治の活動の拠点として活用されており，京都の旧市街地の中に残された歴史的な町並みを形成し，伝統と進取の気風の地の歴史的風致を形成する。

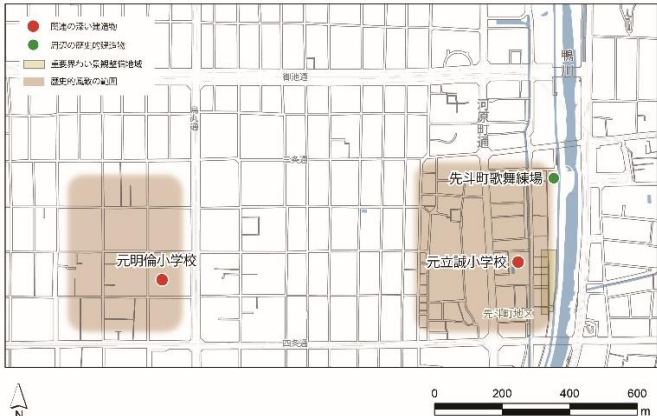


図2-5-5 元明倫小学校・元立誠小学校周辺

(イ) 大学のまち京都・学生のまち京都における

自由な気風の継承

京都には約 40 の大学・短期大学が集まり、歴史的にも「学園都市」として発展を遂げた。また、約 15 万人が学生である「大学のまち・学生のまち」でもあり、人口に占める学生の割合は、全国の大都市で最も高い。

(a) 建造物

○平安神宮大極殿<重要文化財>、神苑<名勝>（再掲：P2-48 暮らしに息づくハレとケのまち京都）

○京都大学本部構内正門<登録有形文化財>

左京区の京都大学吉田キャンパスは、明治 22 年（1889）開校の第三高等学校と同 30 年（1897）開学の京都帝国大学により誕生した。キャンパスの中核をなす本部正門（登録有形文化財）は、キャンパス内で最初期の建造物で、明治 26 年（1893）に第三高等学校正門として築造された、石造左右袖壁付の門である。

正門奥には、もともと第三高等学校以来の本館があったが、大正元年（1912）に焼失した。現在は、大正 14 年（1925）に竣工した鉄筋コンクリート造 2 階建ての百周年時計台記念館が建つ。



写真2-5-18 京都大学本部構内正門（旧第三高等学校正門）

（提供：京都大学）

○進々堂 京大北門前

左京区の進々堂 京大北門前は、学問を愛する創業者が、日本の将来を担う学生たちに勉強をする場を提供したいという理念のもと、昭和 5 年（1930）に創業した喫茶店である。『京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書』（平成 18 年（2006））によると、昭和 5 年（1930）に建築された木造 2 階建ての店舗。外観は洋館で、レトロな雰囲気を醸し出す。



写真2-5-19 進々堂 京大北門前

(b) 活動及び市街地の環境

京都大学の学園祭は、昭和 28 年（1953）毎年行われていた秋の文化祭を、一般市民の祭典にしたいという理由で開催したことから「11 月祭（NF（November festival））」と呼ばれる。「11 月祭（NF）」の前日には応援団主催の前夜祭が開かれるなど、学生が主体となって学園祭を運営する。学園祭は市民にも開放されており、地域に親しまれた行事となっている。昭和 35 年（1960）頃の写真にも学園祭の風景が写る。

京都の大学生における盛んな自治活動として学園祭があるが、学生の成長の更なる支援に加え、地域への定着促進や学生の持つエネルギーにより京都のまちの活性化を図るため、平成 12 年（2000）から京都学生祭典が開催されるようになった。平安神宮前・岡崎プロムナード一帯で繰り広げられ、「大学のまち・学生のまち」を象徴するお祭りであり、1500 人を超える学生により企画・運営される。



写真2-5-20 学生祭典

京都大学周辺は、京都大学を中心とし、吉田山や東山の山麓が近く、自然景観豊かな地域である。京都大学は、歴史的建造物と現代建築が共存し、緑豊かなキャンパスを構成しており、普段から市民も自由に参画したり施設を利用したりすることができる。大学周辺は、百萬遍知恩寺（重要文化財）や吉田神社などの寺社などが近代に開学した大学と共に独特の景観を形成するとともに、進々堂京大北門前などの喫茶店や定食屋、銭湯、下宿などが集まり、学生街らしい町並み

を形成する。進々堂京大北門前では、本を片手に店を出入りする学生や、学生同士が勉学に励みながら、ときに自由に議論する姿などが見られ、大学のまち・学生のまちの息づかいが感じられる。

このように、京都大学では、学生が主体となって地域に開放した祭典が開かれており、大学内外の近代建築物や周辺の寺社など歴史的な町並みの中で、学生たちの自由な気風の文化を感じることができる。

また、明治22年(1888)に設立された同志社大学で開催される大学祭(通称「同志社EVE」)、令和元年(2019)で145回目は、京都御所北側の今出川キャンパスで1週間に渡り開催され、周辺に賑やかな活気が溢れる。

このように、多くの大学・短期大学では、学生の自由な気風の文化が育まれ、学生の活動が地域との関わりを持ちながら京都に新しい風を送り続けるとともに、まちのにぎわいも生み出している。

(7) まとめ

元学区という地域コミュニティやそのシンボルとしての番組小学校は、小学校が閉校となった今も引き継がれ、地域自治の場として継承されている。

全国でも有数の大学・短期大学数を背景に、そこで生活する学生の活力はさまざまな新しい文化を生み出し、活動は大学内にとどまらず地域へ滲み出し、地域住民との関わりを生み出しながら京都に新しい風を吹き込む。

このように、地域の人々の教育や地域自治に対する強い思いと、学生の自由な気風が、活動の場である校舎と一体となり、学園都市としての歴史を感じさせる。

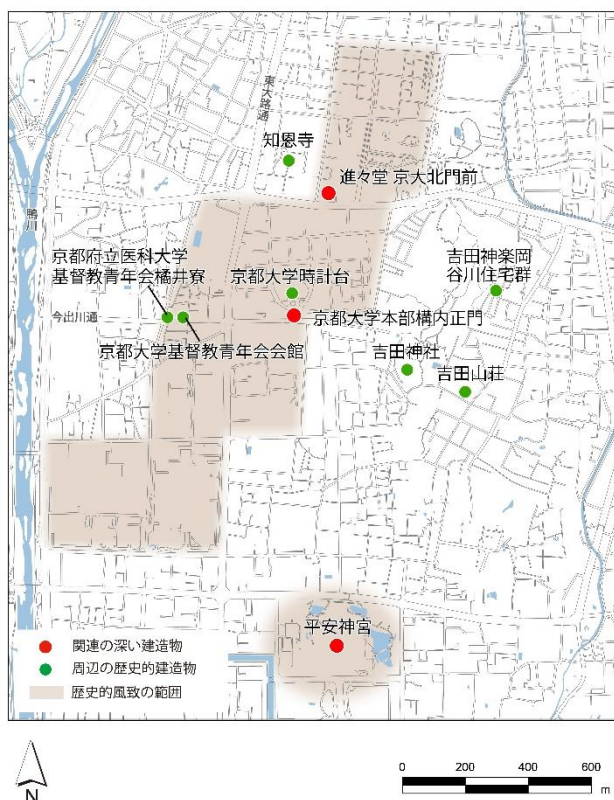


図2-5-6 京都大学周辺

(4) 古都の近代化と商いや賑わいの継承に見る歴史的風致

伝統と進取の気風に富んだ京都では、伝統的な産業と近代化産業が相互に刺激し合い交じり合いながら発展し、大都市として古くから活発な商業活動が行われてきた。

ここでは、東海道の西の起点に位置し、近世以降の商業の中心地として大都市を支えてきた三条通や、明治末期に拡張され商業の中心地となった烏丸通における、古都の近代化と商いや賑わいの継承に見る歴史的風致を示す。

(7) 近代における商いや賑わいの継承

a. 三条通

(a) 建造物

○旧日本銀行京都支店（京都文化博物館別館）＜重要文化財＞

中京区の旧日本銀行京都支店（重要文化財）は、明治 39 年（1906）に建築された煉瓦造の建物で、塔屋をつけるなど、外観には設計者の独特な意匠が見られる。昭和 42 年（1967）に財団法人古代学協会の所有になり、平安博物館に転用され、その後昭和 63 年（1988）に京都文化博物館として開館し、現在も活用されている。



写真2-5-21 京都文化博物館

○中京郵便局＜市登録有形文化財＞

中京区の中京郵便局（市登録有形文化財）は、明治 4 年（1871）に郵便事業が発足した際に、姉小路車屋町に設置された西京郵便役所が前身である。京都郵便電信局として通信省営繕課の設計で明治 35 年（1902）に建築され、昭和 53 年（1978）に外壁保存がなされた。

現在も郵便局として活用されており、江戸時代には飛脚問屋の多かった三条通における近代化を象徴的に表す施設である。



写真2-5-22 中京郵便局

(b) 活動及び市街地の環境

三条通は、平安京の三条大路にほぼ該当する東西路で、天正 18 年（1590）豊臣秀吉が三条大橋を架橋、近世には東海道の西の起点であり、高瀬川の船着場に近接しているなど、物流や情報が集まる地域として賑わった場所であり、京都の中心地として旅籠や両替商、飛脚問屋などが集積していた。安永 9 年（1780）発行の『都名所図会』に三条大橋の往来と三条通の賑わいが描かれる。

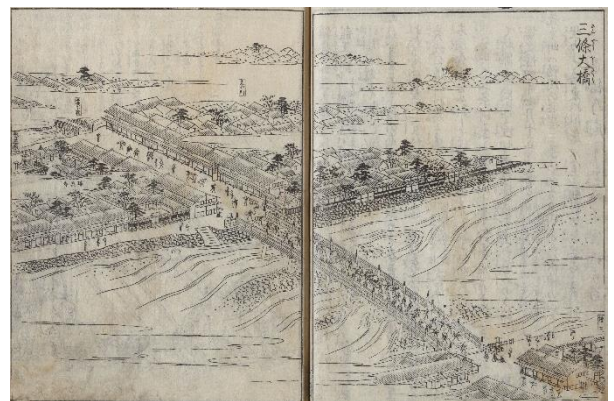


図2-5-7 三條大橋

（出典：『都名所図会』（安永9年(1780)））

こうした繁栄は明治期にも継承され、鉄道の開通に伴い、三条大橋から二条駅までの間は、公共建築、銀行、事務所、繊維関連の大商社、文化施設など近代建築が建ち並ぶ京都の商業の中心地として、脚光を浴びた。旧日本銀行京都支店は、社内資料によると、営業所としては、明治 39 年（1906）から昭和 40 年（1965）まで使われていた。

明治 45 年（1912）に烏丸通が拡張されると、次第に銀行や企業の事務所は烏丸通沿いに移転していったが、これらの移転により、三条通には、多くの近代建築や京町家等の伝統的店舗の混在した町並みが継承されることとなり、江戸・明治・大正期の面影を残す京都を代表する町並みが残されることになった。

現在、三条通の寺町通から新町通までの範囲は「三

条通界わい景観整備地区」に指定されており、歴史的な京町家や町家と比較すると圧倒的にヴォリュームの大きい近代洋風建築など、近世から現代にいたる各時代の建物が混在する。このような町並みの中で、江戸期創業の分銅屋足袋などの伝統工芸品の製造販売や、老舗旅館の営みが今でも伝統的な京町家で行われている。

これらとは対照的に近代以降に商業施設として建てられた近代洋風建築も現存する。現代でも中京郵便局や旧日本銀行京都支店等の近代建築が建ち並び、その多くは商業施設であることから、今なお商業の中心地として人々がこれらの店舗を訪れる様子が見られる。

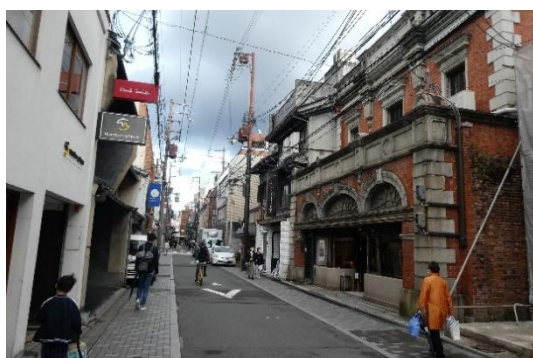


写真2-5-23 三条通

また、三条通は、昭和40年(1965)までは祇園祭後祭の山鉦の巡行路となっていたが、現在は祇園祭還幸祭にて三基の神輿が巡行する。還幸祭当日は、近代洋風建築や京町家を背景に、神輿の担ぎ手や沿道の人々で活気に溢れ、様々な時代の賑わいが継承されて融合する、独特の風情を形成する。



写真2-5-24 三条通の祇園祭後祭の様子(昭和35年(1960))

(所蔵：佛教大学宗教文化ミュージアム)



写真2-5-25 三条通の祇園祭還幸祭神輿渡御

(提供：京の三条まちづくり協議会)

さらに、三条通の河原町通から寺町通までの間は、三条名店街と呼ばれる約187mの商店街で、京都市内でも古い歴史を持ち、古写真によれば昭和30年(1955)頃にはアーケードが設置され、天蓋部分に取り付けられた蛍光灯が通りを華やいた雰囲気にも照らした。現在も老舗の店舗からコンビニまで新旧の商いが混在し、華やかな賑わいと独特の町並みを形成する。

このように三条通では、伝統的な京町家と近代建築とが建ち並ぶ町並みに伝統産業と近代の商いや賑わいが継承されており、かつてより商売の中心地として発展した様子が今なお見られる。これらの町並みを背景に伝統的な祭礼も執り行われ、明治の文明開化の面影を今に伝える都市文化軸として、固有の風情が感じられる。

b. 烏丸通

(a) 建造物

○新風館(旧京都中央電話局)〈市登録有形文化財〉

旧京都中央電話局(市登録有形文化財)は、逓信省の京都中央電話局として吉田鉄郎の設計で建築された。工期は大正14年(1925)～15年(1926)の第1期工事と昭和4年(1929)～6年(1931)までの第2期工事に分かれる。西面の連続アーチが特徴で、日本近代建築のパイオニア吉田鉄郎が、国際建築様式を取り入れる直前の作品である。現在は、複合商業施設として活用されている。



写真2-5-26 新風館

(b) 活動及び市街地の環境

烏丸通は、平安京の烏丸小路に当たり、明治10年(1877)の京都駅の開業を経て、明治45年(1912)に京都市三大事業である市電の敷設に伴い拡幅整備され、大正天皇、昭和天皇の即位大礼の際には京都駅から御所に至る「行幸通」となった。また、大正初期から、銀行、証券会社、保険会社等が建ち並び、京都きってのビジネスストリートとなった。元逓信省の京都中央電話局を転用した新風館や旧山口銀行京都支店といった近代建築は、その時代を象徴する建築物として現在も保存・活用されている。



写真2-5-27 烏丸通絵葉書(明治45年(1912))

(出典:『絵葉書で見る京都:明治・大正・昭和初期』
(平成24年光村推古書院))

烏丸通は、大正期に御所と京都駅を結ぶ道路として拡幅され、さらに、地下鉄烏丸線が開通し、交通機能が強化されたことにより、業務集積だけでなくホテルや物販施設等、賑わい施設が増え、賑わいのある通りが形成されている。そのような中で、沿道には銀行建築等の歴史的な建築物が建ち並ぶ京都随一の格調ある通り景観を形成する。



写真2-5-28 祇園祭宵山時の烏丸通(提供:八幡山保存会)

祇園祭前祭の宵山(山鉦巡行の前日)には、御池通から高辻通まで歩行者用道路となり、この町並みを背景に多くの人々がライトアップされた山鉦や会所飾りを楽しむ。翌日の山鉦巡行で古都京都と近代化を一体に感じられる街中で山車が巡行する様子は、京都固有

の歴史的風致を形成している。

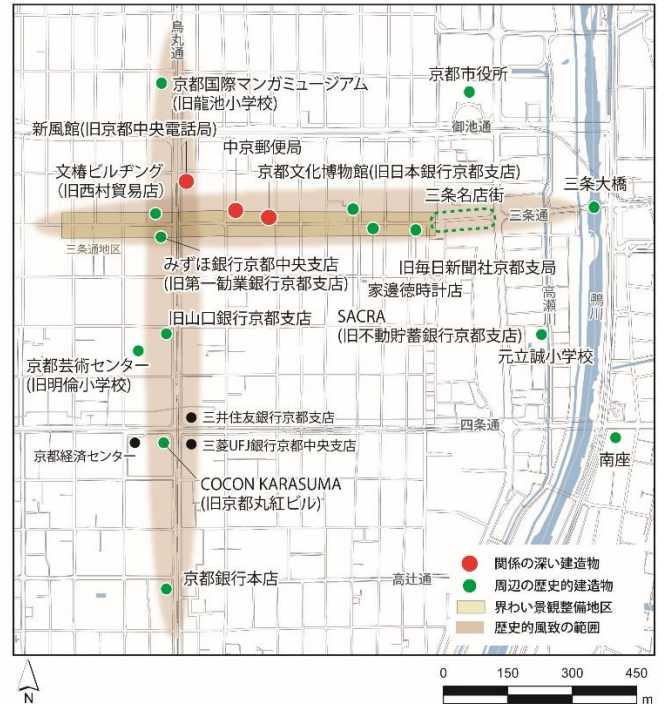


図2-5-8 三条通・烏丸通

(7) まとめ

三条通・烏丸通は近世以来の京町家や近代以降の洋風建築などが混在し、これらの歴史的建造物に多くの人が集まり、商いや賑わいの場として継承し続けることで、古都京都の伝統と進取の気風を感じることができる。また、これらの町並みを背景に伝統的な祭礼も執り行われ、固有の風情が感じられる歴史的風致を形成している。

(5) おわりに

伝統と進取の気風を併せ持つ京都の人々は、東京^{てんと}奠都という大きな逆境にも負けず、京都の再生のために独自の産業や都市機能を作り上げ、近代化を成し遂げた。

近代化にあたっては、伝統的な産業と近代的な産業が互いに影響を与えながら発展してきたこと、また次世代の担い手の育成を重視し、それが地域コミュニティの醸成に繋がってきたことが大きな特徴として挙げられる。

これらの近代化遺産及び先進の自負が京都に暮らす人々にとっての誇りとなり、それが現在の町並み、生活の営みに引き継がれ、伝統と進取の気風の地の歴史的風致を形成している。

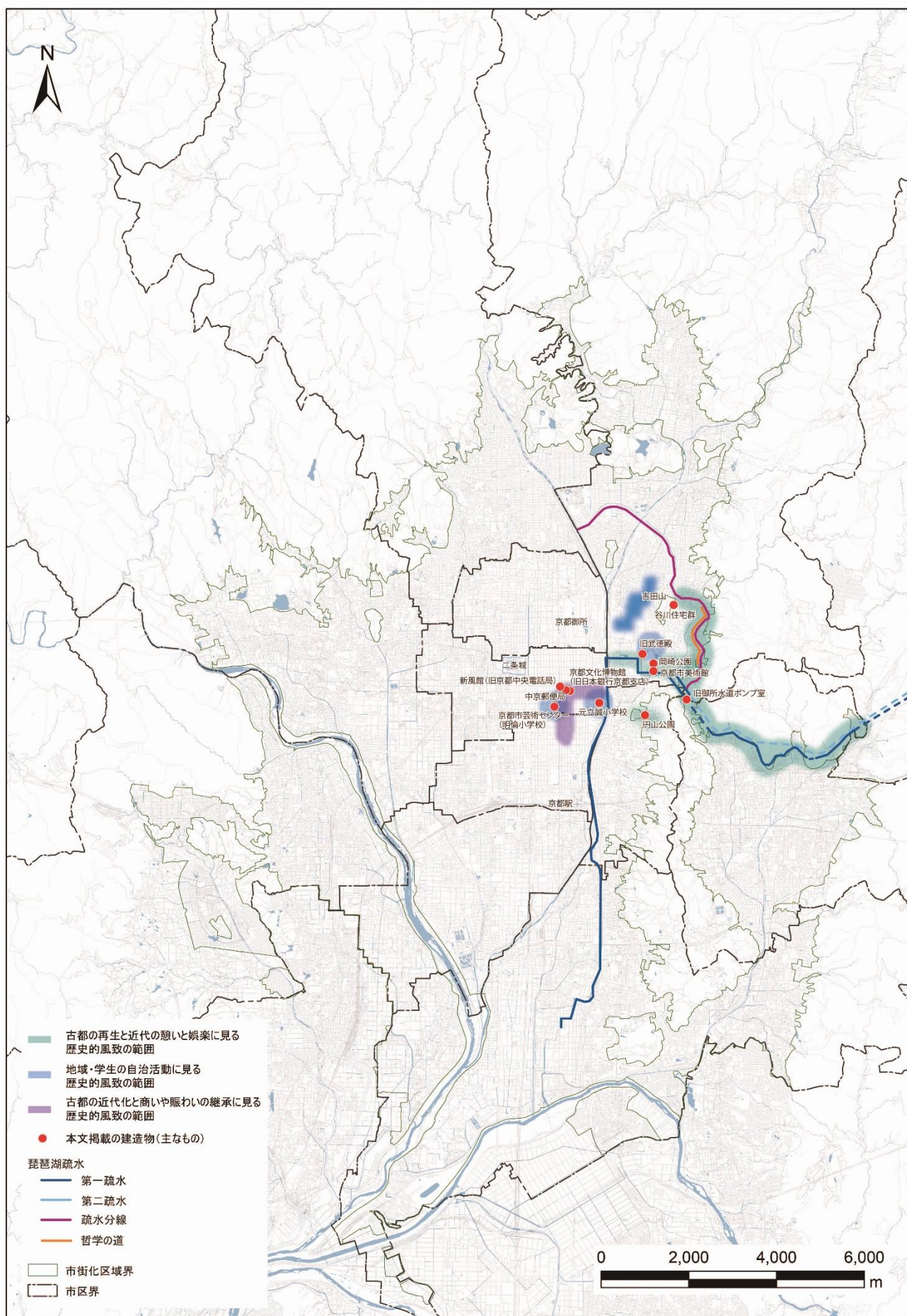


図2-5-9 伝統と進取の気風の地に見る歴史的風致（総括図）